

時代と世相

— 変わりゆく人と国家 —

人財

Vol. 64

東京都渋谷

この地は平安時代末期に武蔵国を支配した豪族・渋谷氏が支配し、現在の金王八幡宮周辺に中世の城を構えていました。

渋谷川を内堀とし外堀を目黒川としていたようですが、1524年 ^{ほうじょうじつな}北条氏綱率いる北条氏の攻撃を受けて落城し、以後、この地は北条氏の支配下に入りました。

江戸時代には、徳川幕府の支配下となり、旗本屋敷、一部の大名下屋敷が建てられ、低地には農村が広がっていた様です。

大正時代、日本を代表する唱歌「春の小川」のモデルとなったのは、渋谷川の支流の ^{こうほねがわ}河骨川で、春にはスマレやレンゲが咲き、メダカや小魚が泳ぐ美しい自然の川だった様です。

同じく大正 12 年(1923 年)、秋田県大館で生まれた秋田犬を、東京帝国大学農学部教授 上野 英三郎博士が飼い、教授はこの犬にハチと名を付け毎朝ハチを連れて渋谷駅まで行き、夕方にはハチが駅で主人を迎えるのが日課でした。

1925 年 5 月、上野教授が大学で急逝されますが、ハチはその後約 10 年間、毎日渋谷駅へ通い続け、主人の帰りを待ち続けたのは有名な話です。

そして現在、渋谷の街は大きく変貌し、街には人がごったがえし、通りを歩くのも大変な街へと変わりました。

そして、その半数以上が歴史的円安を背景とした海外からの旅行者と滞在者を含めた外国人、残りのほとんどが今風のファッションで、今風の化粧をした若者ばかりで、大人が歩くのがはばかりされる様な街へと変わってしまっています。

翻って、シンガポール

先日も用が有って行ってきましたが、その際シンガポールの学校（インターナショナルスクールと大学）を見学してきました。

優秀な若者が集まってきて育つレベルの高い教育システムが出来上がっていて、環境、そして優れた指導体制と勤勉で質の高い学生が学んでいるところを見学し、かつて建国後、「ルックイースト」政策で日本を手本として国家建設を進めてきたシンガポールは、今では日本を抜いて世界でも最も質の高い国家、国民に成長し、経済、教育、知財、国防等、主要な国家戦略では質において日本はもはや追いつけない状況にまで進化しています。

ちなみに NUS（National University Of Singapore）は世界ランキング 8 位で、日本 1 位の東大は世界 26 位となっています。



マリーナベイ・サンズ（シンガポール）
（撮影：徳真会グループ 代表 松村 博史）

また、OECD が実施する PISA（学習到達度調査）の学力ランキングでは、数学、読解力、科学の 3 分野で全て世界トップがシンガポールで、日本は数学 5 位、読解力 3 位、科学 2 位となっています。

こうした現状を見るにつけ、今日日本が急いで行うべき事は、世界に通用する人財育成への大胆な改革だと思います。

日本は今、謙虚になってシンガポールから学ぶ立場ではないでしょうか。

人財育成には数十年の歳月が必要な事を考えると、将来日本の発展の為には、次世代の人財の育成を今から戦略的に行っていく必要性を強く感じます。

一年の計は穀を樹うるに如くはなし（一年で成果を挙げようとするなら、穀物を植えることだ。）

十年の計は木を樹うるに如くはなし（十年先を考えるなら、木を植えることだ。）

終身の計は人を樹うるに如くはなし（終身の計を立てるなら、人材を育てることに尽きる。）

という春秋時代の政治家・思想家 ^{かんちゅう}管仲の有名な言葉を今改めて真剣に考える最近です。

徳真会グループ
代表 松村 博史